

日韓親善委員会その後



藤沢北 細谷 実

一九七九年の十一月、ソウルでアジア地域大会が開催された際に、ロータリーの友の主催で対談が行われました。日本側からは千宗室P G（RIAアジア地域大会委員及び国内推進委員）と、私、細谷P G（アジア地域大会国内推進委員）がのぞみ、韓国側からは呉在環P G（アジア地域大会実行委員長）が出席され、加藤進治氏の司会で話がかわされました。

その時、この地域大会が日本からも六千名が参加してまことに有意義であったこと、これを契機に日韓親善委員会（韓国側では韓日親善委員会）を作って、両国の親善会議を定期的にも

とうではないか、という話ができました。

それで、呉P Gと千P Gがお互い、両国のガバナー連絡会議にはかって賛成を得、一九八〇年三月三日に先方から、呉善煥P Gが東京に来られ、青山幸高ガバナー連絡会議連絡委員会委員長との間で、調印がなされました。



日韓親善委員会風景、あいさつする千元ガバナー

しかし会議開催は、朴大統領暗殺事件、光州事件、更には日本側委員の都合がつかなかったこともあつてのびのびになり、やっと本年七月二十四日午後二時からソウルにて、第一回の日韓親善会議開催の運びとなりました。

当方は千委員長、末永委員、それに私、細谷委員が出席しました。韓国側は呉在環委員長はじめ、全委員、並びに多くのP Gが陪席されて議事が行なわれたのですが、その夜の晩餐会には公式訪問で忙しい現ガバナーがソウルに集合され、それに多くのP Gが参加されて大歓迎会となりました。私は日本を立つ時、せいぜい数名の委員との会合になるだろうと思っていましたので、この予想外の歓迎ぶりにはいささか驚き、韓国側のこの会議に対する並々ならぬ意気込みを感じとつたのでした。

さて会議では、まず呉委員長から経過並びに挨拶があり、千委員長の所感及び挨拶がこれに続き多くの委員及び陪席のP Gから、たくさん発言がありました。その中では次の様なお話が多く出たことを、報告せざるを得ません。ポール・ハリスはロータリーでは不愉快な議論はこれを避けよ、と言っておりますが両国の親善にとって、それらは避けて通れないと思われます。それは、あるP Gの発言でしたが、日本と韓国は地理的に最も近いのに精神的には遠い国であるということです。その理由に、歴史的に

両国がしばしば不幸な関係にあったことがあげられました。

考えてみれば十六世紀の秀吉の朝鮮出兵、第二次大戦までの三十六年間の日韓併合時代など、韓国の人々が被った事実からすれば特に年配のP Gからこういった発言が多かったのも、当然のことと思われました。しかしそれらは決して、友好を損う形ではありませんでした。むしろこういって不幸な関係があつたからこそ、今度は真の友好の実をあげましょう、という発言だったのでした。私はその熱意に圧倒される思いでした。こうして会議は、青少年を通じての親善、両国の委員の増強などが提案され、次回は京都での開催を約して閉会しました。

歓迎晩餐会の席上、千、末永両P Gのご挨拶のあと、私は次のように申しました。

「私は歴史学徒でした。昔から両国の間に多くの交流のあつたことを知っています。韓国の文化に対して尊敬の念を抱いています。過去も最も近い両国でした。これからも末永永劫にわたって隣国であります。この運命は避けることはできません。両国が理解と親善を強力に進めることは重要です。このことに対する韓国の皆様の熱意を日本のロータリアンに伝えます」と。

この日韓親善が、実り多いものになることを願うや、切なる次第です。